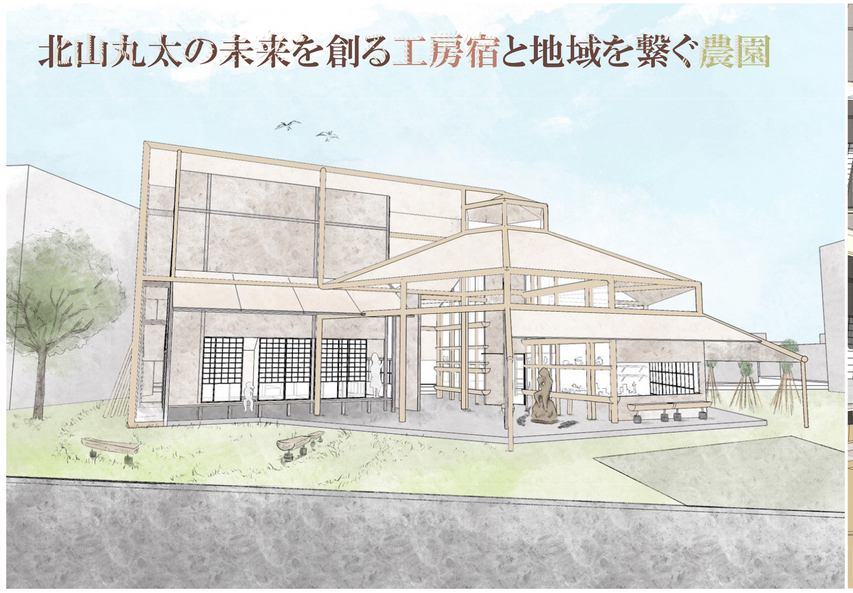
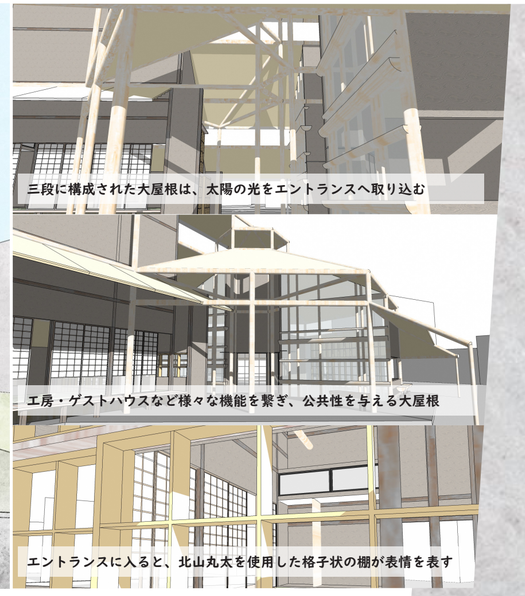
北山丸太の未来を創る工房宿と地域を繋ぐ農園



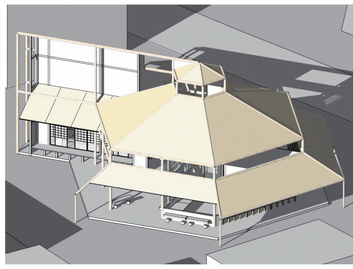


設計趣旨

『京都の文化を支える北山杉林業の資源利用と景観に関する研究』において、「北山杉林業においては、木材需要減少および高齢化による施業の停滞、後継者問題などが課題」であることが明らかになった。北山林業へ若者が北山丸太を【知る】【考える】【つくる】【提案する】といった場そして、その場に北山丸太への興味関心を中心とした関係性構築の場が必要であると考える。

北山丸太の第二の拠点が必要として、北山杉林業の歴史と技術を尊重・継承しながら、現代のクリエイティブな力を結集させ、地域と共に発展する新しい空間を創出していくことを目的とする。

本提案が若者から始まる北山丸太への関わりから、これまで北山杉林業の枠組みを超えて、北山丸太がより身近に感じられるような最初の地域となることを目指す。



北山丸太でつくる町の象徴のカタチ

本建築は、円町の暮らしの象徴として、多方面から人々を引き込むことをカタチに落とし込んだ。北山丸太材を用いて、トラス状登梁を放射状に架け渡し大屋根を形成。

また、内部に配置した複数の機能を人・空間・地域と様々な単位で繋ぐ。

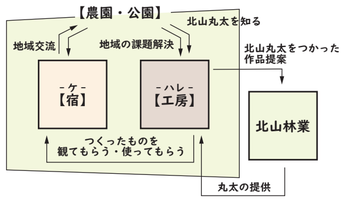
敷地対象｜京都市中京区西ノ京北円町

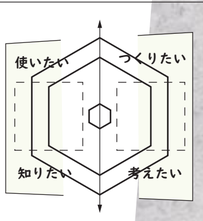
本提案では、丸太町通り近くにある京都市中京区西ノ京北円町にある特定エリアを計画地として選定した。京都市北区中川を中心とした北山林業の地域とのアクセス、大学生や小中高生、地域住民など様々な人との関わりが生まれることを考慮した。同時にその地域が抱える課題解決と地域性を活かした空間づくりを目指す。

敷地対象は、西大路通りから１つ離れた道沿いに位置し、西側に川が流れ、生活音は程よい。生徒・学生との関わりに関して、周辺には複数の教育機関（小中高・大学）、西大路通りと丸太町通りから遠方からのアクセスもしやすい場所である。

北区中川北山町は、北山杉林業の中心地として歴史的な背景を持つ場所です。この地区は、長年にわたり林業が行われ、地域住民や林業者がその伝統を守り続けてきました。本提案の工房は、北山杉林業の「第二の拠点」として学生やクリエイターを支える場を設け、新しい関わりを生む。

ハレ【工房】とケ【宿】と、人々をつなぐ大屋根と、、農園・公園と、、、



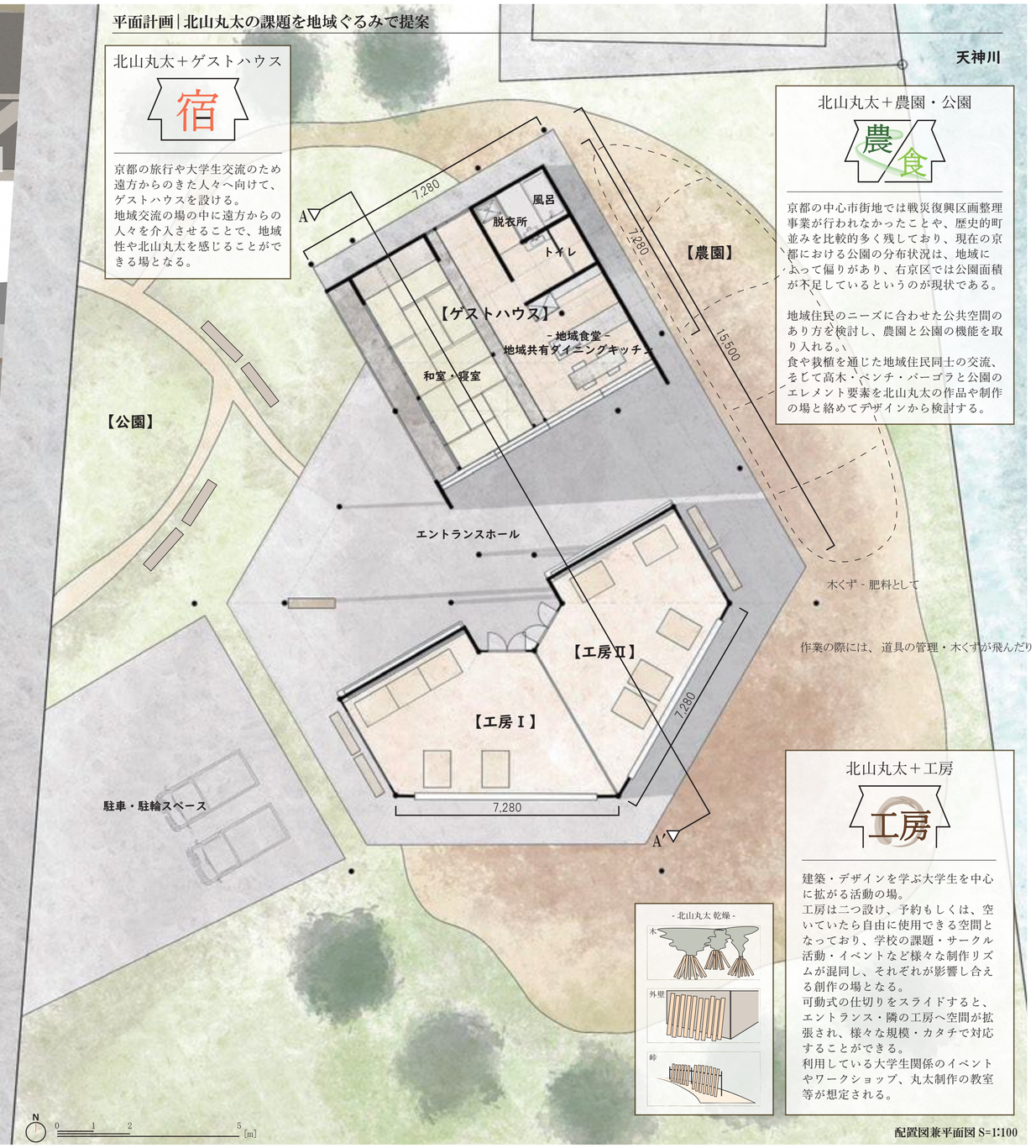


ハレ【工房】:建築・デザインを学ぶ大学生を中心に北山丸太を使った制作の場、その他学校の課題、研究、サークル活動の場を設ける。また、北山丸太の第二の拠点として、北山林業とのパイプをつくり、学生やクリエイターなどへ丸太の提供、丸太を使い北山林業へ提案する場となる。学生の関わりが増えるほど北山丸太が伝播される。

ケ【宿】:ゲストハウスとして設ける。丸太の空間、ひいては地域の日常、関わりに触れる。

つくり手の大学生を中心にした関わりの場をつくることで、関わりに比例して、北山丸太の可能性も拡張していき、農園・公園を介して、北山丸太を「知りたい」「考えたい」「つくりたい」、「使いたい」とそれぞれの目的を持つ人々が集い、北山丸太が身近な存在へとなっていく。地域ぐるみで丸太の使われ方を模索していく場になる。

平面計画｜北山丸太の課題を地域ぐるみで提案



北山丸太＋ゲストハウス

宿

京都の旅行や大学生交流のため遠方からのきた人々へ向けて、ゲストハウスを設ける。
地域交流の場の中に遠方からの人々を介入させることで、地域性や北山丸太を感じることができる場となる。

北山丸太＋農園・公園

農食

京都の中心市街地では戦災復興区画整理事業が行われなかったことや、歴史的町並みを比較的多く残しており、現在の京都における公園の分布状況は、地域によって偏りがあり、右京区では公園面積が不足しているというのが現状である。

地域住民のニーズに合わせた公共空間のあり方を検討し、農園と公園の機能を取り入れる。
食や栽植を通じた地域住民同士の交流、そして高木・ベンチ・パーゴラと公園のエレメント要素を北山丸太の作品や制作の場と絡めてデザインから検討する。

北山丸太＋工房

工房

建築・デザインを学ぶ大学生を中心に拡がる活動の場。
工房は二つ設け、予約もしくは、空いていたら自由に使用できる空間となっており、学校の課題・サークル活動・イベントなど様々な制作リズムが混同し、それぞれが影響し合える創作の場となる。
可動式の仕切りをスライドすると、エントランス・隣の工房へ空間が拡張され、様々な規模・カタチで対応することができる。
利用している大学生関係のイベントやワークショップ、丸太制作の教室等が想定される。

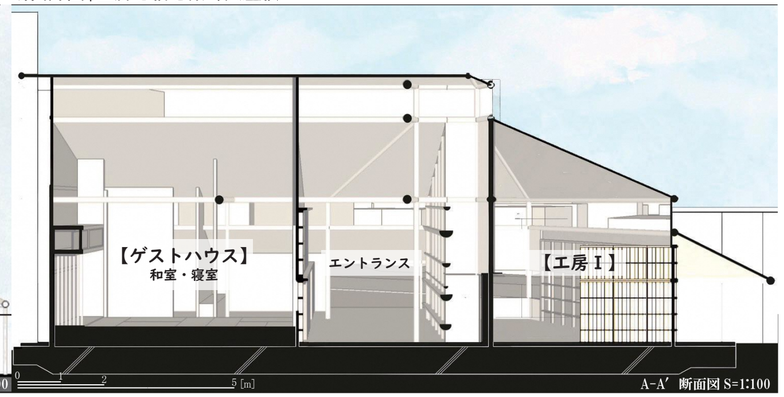
配置図兼平面図 S=1:100

立面計画｜丸太で形成されるファサードデザイン

東側立面図 S=1:100

西側立面図 S=1:100

断面計画｜工房と宿を繋ぐ大屋根



A-A' 断面図 S=1:100